

## 毛利藩船倉・東行庵を訪ねて

とうぎょう

資料提供 野々下 静

(会員 佐伯市狩生)

平成二十三年度史談会一日研修は、九月十五、十六日の二日間山口県方面にて実施された。

十五日、山口県下関市長府の毛利邸、功山寺、長府博物館、東行記念館。十六日、萩藩御船倉、萩博物館、大照院、松下村塾を訪問。参加者は二十一名であった。

長府の毛利氏は、慶長五年(一六〇〇)関ヶ原の戦いに敗れた毛利輝元が防府・長州二九万六三七〇石に減封され、従兄弟の秀元が長府藩として勝山城を築いた所である。

しかし、勝山城は一國一城令で十五年ほどで廃城となつている。

この長府の一郭にある功山寺は、慶長七年、長府藩祖毛利秀元が修営旧観に復した毛利家の菩提寺である。

この寺は、元治元年十二月高杉晋作が伊藤博文(力士隊)、河瀬真孝(遊撃隊)ら八十余名と決起し、毛利藩俗論派と対決、太田絵堂の戦い等を通して藩の考えを恭順から倒幕に変えた地である。

力士隊、遊撃隊は、文久三年六月下関の廻船問屋白石正一郎宅で、高杉晋作等により結成された奇兵隊(藩士と藩士以外の武士、庶民からなる混成部隊)の一つである。

高杉晋作は、名は春風、字は暢夫、東行と号し天保十年(一八三九)八月、萩藩士高杉小忠太春樹の長男として萩城下菊屋横丁に生まれた。藩校明倫館、私塾松下村塾を経て、文久元年毛利定広の小姓を命じられ、翌年、藩命で幕使とともに上海に渡航し海外の諸情勢をつかみ尊攘論の急先鋒として活躍した。

文久三年、奇兵隊を組織し総督に命じられる。長州藩反幕勢力の軍事的基盤として明治維新に大きな働きをした。

元治元年功山寺で決起し藩論を統一した後、慶応二年六月の長州征伐(四境戦争)では全藩を指揮、久賀沖・小倉口の戦いで活躍した。翌慶応三年四月、下関の新地にて

二十九才で病死。遺言により下関市吉田村清水山に葬られた。現在、ここには多くの奇兵隊士の墓とともに東行庵があり、高杉晋作の遺物や関係文書が収蔵されている。

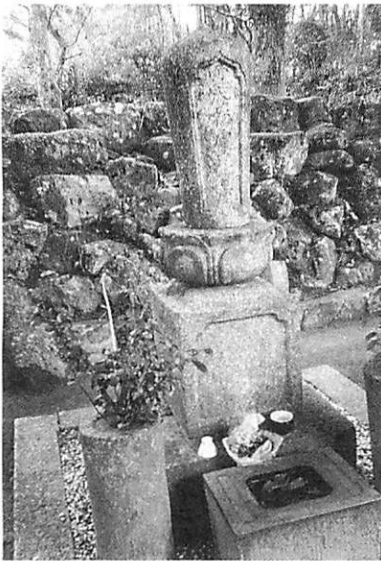


高杉晋作の菩提を弔った東行庵（下関吉田）

この東行庵は、明治十七年（一八八四）伊藤博文、有朋、井上馨らの発案で、著名士の寄附をつのり建立され梅処尼（谷梅処）に贈られたものである。

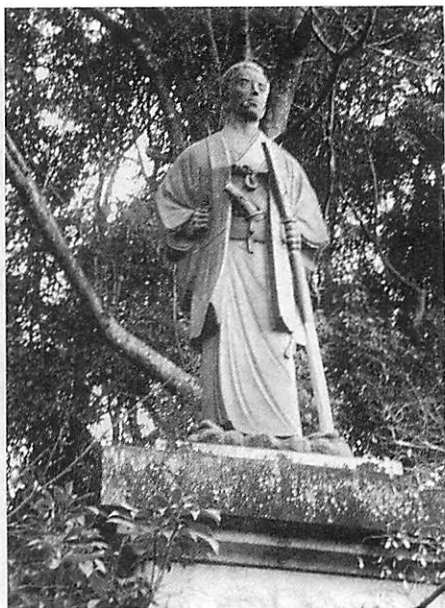
東行庵の前身は、山県有朋が所有していた「無隣庵」で、明治七年晋作に仕えていた愛人「うの（梅処尼）」に周辺地を含め贈られた地である。

梅処尼は、明治四十二年その生涯を閉じるまで東行の菩提を弔った。東行の墓の斜め下に梅処尼の墓が残されている。



初代 梅処尼の墓

この東行庵は現在公園になっており、山頂の広場には高杉晋作の墓や銅像、顕彰碑等が建てられている。



明治四十四年に建てられた高杉晋作顕彰碑は、公爵毛利元昭氏の篆額 伊藤博文撰の顕彰碑で高さ三、二米ある。碑文には、「動けば雷電の如く発すれば風雨の如し……」で始まる文が刻まれている。銘文は明治三筆の一人杉孫七郎氏によるものである。



右は高杉晋作（東行）の墓である。墓の周りの石柱には「遊撃軍建立」「龍集丁卯秋九月」の文字が刻まれている。東行庵周辺には、下関竹崎の勤王商人で歌人である白石正一郎（資風）の歌、「白たへにはへる梅の花ゆえにあけゆく空もみどりなるらん」の碑や、東行百年忌に創られた小原六六庵の漢詩「奇兵隊長睡斯山 明治已来悠俗 寶 想起當年不堪見 杜鵑花発松柏真」の歌碑、昭和六年二月にこの地を訪問した歌人、飯田蛇笏の句碑「松風にきき耳たつる火桶かな」などがある。

また、高杉晋作の心意気を顕す歌碑もある。



この歌碑には「題 焦心録」と書かれており、当時の高杉晋作の気持ちを良く表している。

内憂外患迫吾州 内憂外患吾が州に迫る  
正是邦家存亡秋 正に是れ邦家存亡の秋  
将立回天回運策 将に回天回運の策を立てんとす  
捨親捨子亦何悲 親を捨て子を捨つる

亦何ぞ悲しまん

この歌は元治元年晩秋の作とされている。高杉晋作二十五才の時の詩である。さらに東行庵入口には、高杉晋作と望東尼の歌碑がある。

面白きこともなき世におもしろく  
すみなすものはいのちなりけり

晋作  
望東尼もとに



奇兵隊隊士の墓

十五日はこの他に乃木神社、長府博物館を訪問した。  
翌十六日は萩城跡、松下村塾、萩資料館、大照院等を見  
学した。(写真は笠山下の明神池)



萩、笠山下の明神池

萩城は、慶長九年(一六〇四)毛利輝元が指月山の山城  
を改築して詰丸とし、その麓に白亜の五層の天守閣を持  
つ平山城として造られた。以来明治七年まで、毛利氏十三  
代の居城として栄えた。

安政二年十二月、病氣療養のため野山獄から杉家にも  
どった吉田松陰が、居宅の幽囚室で起居しつつ孟子の講  
義を始めた。これが松下村塾教育のはじまりである。

松下村塾は、吉田松陰の叔父玉木文之進、外叔父久保五  
郎左衛門の私塾の名前である。

松陰は安政四年よりこの私塾に場所を移し講義を続け  
た。人数は一日に六、七人から三十人にも及び、門下から  
高杉晋作、久坂玄瑞、入江九一、伊藤博文、吉田稔麿、前  
原一誠、品川弥次郎、山田顕義、山県有朋、野村靖、木戸  
孝允などの名士が輩出した。

大照院は明暦二年(一六五六)に毛利家菩提寺として創  
建された臨済宗の寺で、初代と偶数代の藩主の墓が祀ら  
れている。三代から十一代までの奇数代の墓は元禄四年  
(一六九二)三代藩主毛利吉就により建立された東光寺に  
祀られている。

この萩の町には、この他に厚狭毛利氏の萩屋敷長屋や藩校明倫館の跡（現明倫小学校）等が残されている。また萩の町を形作っている松本川の川口付近には、萩藩の御船倉や鶴江の渡し跡、浜崎の町家等が残されている。



旧萩藩の御船倉の前で

松本川の川口、萩商港付近にある旧萩藩の御船倉は、まわりを石垣で囲まれたもので当時は海に直結していたと言う。

説明によると、御船倉は藩主の御座船を格納した場所  
で慶長十三年（一六〇八）年萩築城後まもなく建てられた  
と考えられている。

両側と奥に玄武岩で壁を築き、上部に瓦屋根を葺き、前面は木製の扉を有している。

大きさは桁行き二十六、九メートル、梁間八、八メートル、高さ八、八メートル、石壁の厚さは六メートルである。大船倉が一棟残っているが、享保年間（一七一六～三三）作成の萩城下絵図には三棟。天保年間（一八三〇～四三）作の「八江萩名所図絵」には四棟の船倉が描かれている。明治初年に北側の一棟、昭和三十七年に南側の一棟が取り壊された。

現在は、明治以降の埋め立てのため、川岸から離れた所になったが、松本川に面して船が自由に入出入り出来る場所であった。

近くの住吉神社に残る「お船話」は、藩主が船に乗船する時、又は新造船として進水する時、年頭に御代官が乗り



萩御船倉付近にある住吉神社

始めの行事を催す時謡われた。万治二年（一六五九）住吉神社が勧請されてからは、住吉神社の神幸祭で謡われるようになった。



現存する浜崎地区の商家群

この住吉神社付近は浜崎地区と呼ばれ、数多くの問屋や商家が伝統的建造物群として残されている。その代表的な商家に山村家、山中家などがある。

山村家の住宅は、南側の主屋（一七三、三二平方メートル）、北の主屋（七七、七六平方メートル）、離れ（二九、〇九平方メートル）、南土蔵（六五、八四平方メートル）、北土蔵（三五、九〇平方メートル）からなる大きな商家である。

旧山村家は江戸時代に建てられた浜崎地区の伝統的建造物群保存地区の中心的な建物で、山村船具店であった。この浜崎地区には、この他に

- ・ 藤井家——「白根屋」の屋号を持つ海産物問屋
- ・ 齊藤家——魚仲買を営む海産物問屋
- ・ 池辺家——かまぼこ製造業者
- ・ 中村家——漁網製造漁具船具金物店
- ・ 須子家——造酒屋・両替商
- ・ 梅屋——鉄砲などを仕入れる貿易商
- ・ 林屋——「奈古屋」の屋号を持つ油屋・精蠟屋
- ・ 田中屋——「田槌」の屋号を持つ水産加工鮮魚商
- ・ 藤山屋——「藤山商店」雑貨商、中国と貿易がある。

浜崎地区は、萩北東部の三角洲上に造られた港町で廻船業や魚市場があった。江戸時代に四十四の店が在ったと言いつ。



江戸時代の浜崎地区の地図





山村家のなまこ堀

広さ一〇、三ヘクタールの伝統的建造物保存地区である。この山村家の造りは、萩付近ではめずらしい表屋造りおもてやと呼ばれ京・大阪の豪商に見られる建築様式を示している。

一旦室内（土間）に入り、再び中庭に出て、次に玄関がある。公的な店の部分と私的な邸宅部分に分けられる。中庭には石灯笼や池が造られており情緒豊かである。他に蔀戸、漆喰壁、格子、なまこ堀などが見られた。

この付近に残る店には江戸時代、離れや茶室が造られていたという。小堀遠州系の茶室も在ったと資料に書かれている。

浜崎地区の松本川沿いには、今も多くの商家や船着き場があり、江戸時代の鶴江の渡し場も残されている。



鶴江の渡し

